

山田村史 上卷

## 第四節 口承伝説

さらに、次の三伝説において、史実とはいい難いが、山田村の古代史・中世史につながらる、何かを知るものがあるのでなからうか。

### 猿丸太夫の塚

猿丸太夫は、奈良時代、人皇第四十三代元明天皇のころ、または元慶（がんきょう）（八七七〜八五）のころの歌人といわれる。三十六歌仙の一人で、小倉百人一首に、次の歌が採ってあり、よく知られている。

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の

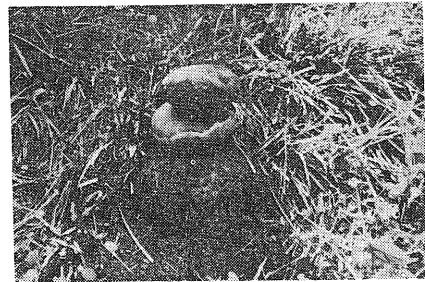
声聞く時ぞ秋はかなしき

然るに、当村の数納地区（いまは廃村）では、この歌は当地での詠歌であると伝えている。太夫が諸国行脚のとき、越中へも来て、砺波郡の方から牛嶽を経て山田の里へ出ようとして、深道（いまは廃村）の打保峠を越え、前方に山田川が流れている、対岸の数納村の後の御鷹山一帯にかけて満山紅葉、照り映ゆる美観の中に、妻を恋うて鳴く鹿が見え隠れする。その哀れさもひとしおで、しばらく足を止めて詠んだ一首であるという。

それから山道を下り川を歩渉りして、数納の村に着き、小庵を結んだ。場所は氏神社の境内で、いまも、村人が太夫を偲んで建てた小さな五輪塔が、草むらに残っている。山里ながらまことに風雅な伝説である。史実は不明であるが、山岳仏教の栄えた土地へ行脚してきた僧人や旅人の語り草が伝承されたのであろう。

山田男と白滝姫

民俗学上、「山田白滝」の伝説は、全国的に類話があつて名高い。当村でも二話が語られ



猿丸太夫の塚

ている。

① 鎌倉地区

むかし、むかし、鎌倉村の田中八左衛門の先祖に二人の男の子があった。兄は家を継いで農業を励んだ。弟は大そう頭がよくて利漕な子であったので、お寺の住職に勧められて、京都へ行って志を立てることにした。宿屋の主人の紹介で、あるお公卿に仕えた。純朴・忠実なので、「山田男よ、山田男よ」と目をかけて愛された。ひまびまには、読み書きも習い、歌を詠めるようになった。

ある日、湯殿（風呂）の湯を沸かすこと命じられた。やがて湯加減がよくなったので、お知らせすると、公卿の娘の白滝姫が入られる事になり、湯殿へ来られて湯加減を見て、熱いから水をさすようにとおっしゃった。山田男は畏まって、手桶に水を汲んできて注ごうとしたところ、ふとしたはずみで手桶の腕木がお姫にひっかかった。すると、姫は、次の歌を

霞さへかかりかねたる白滝に

心がけるな山田男よ

と詠んでからかった。これに対して山田男は直ちに

照り照りて苗（草？）の下葉が枯れる時

山田に落ちよ白滝の水

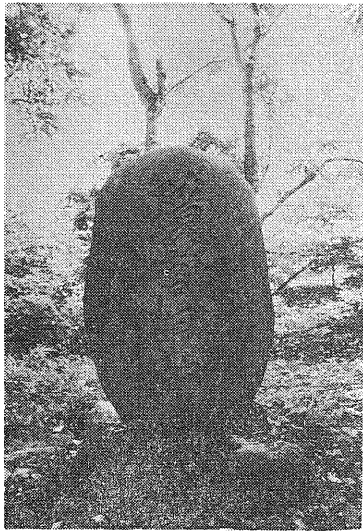
返し歌を詠んだ。

この様子を障子の蔭で見えられた公卿が、山田男の機智に大そう感心されて、山田男を呼んで、「姫を汝の妻として結婚させてやろう。故郷の鎌倉村へ連れて帰るがよい。」

とおっしゃった。山田男は、自分のような田舎者にはもったいないお話ですから、そんなお気づかいして下さるなど申し上げたが、「遠慮はいらぬ」といわれたので、有難くお受けして姫を連れて故郷へ帰ってきた。なお、京都の館を出発する時に、母君は片身にするようにと、大切にしておられた、黄金作りの合せ鏡を姫に授けられた。

やがて故郷の村に帰って家人に話すと、一同大へん恐れ入り「そういう身分の高いお姫君と朝夕一緒に住むことは申し訳ない」といって、山田川の対岸の向い原（鏡が窪）に、新宅を造って住んでもらったそうである。その後、山田男夫妻は、村人に都の文化を伝えて、学問・産業を教え授けたので、村の生活が向上したといわれる。なお、姫がいただいた鏡は、一面は村の氏神八幡社に、もう一面は外輪野用水の守護神として、いずれも御神体になっている。

② 宿坊地区

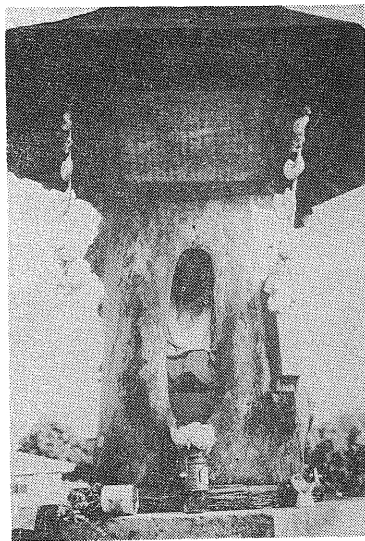


鏡宮旧跡

この地区の話では、鎌倉地区とはやや異っている。時代は鎌倉時代で、奉公先は、幕府に仕える武家の屋敷であった。ある日、山田男が庭で草むしりをしていたら、姫の白滝様が散歩に出られた。その時、姫の袖が垣根にひっかかった。それを姫は、山田男が袖を引いたと考えちがいで、次の歌を詠んで与えられた。

白滝に心寄せたか庭男

山田男は、すぐに次の歌を詠んで返した



北條時頼地藏

白滝も流れ落ちれば田の力  
この歌のやりとりが縁のきっかけとなり、兩人は恋愛するようになった。父君は自家一門の名誉をそこねるとし困られたが、兩人の仲の熱いことを憐んで、ひそかに山田男の故郷に送り届けて結婚させられたのであった。その時、支度の金品をたくさん与えられたので、立派な館を建てて一生仲よく暮らしたそうである。その後、その村を鎌倉と呼ぶようになり、今日に至ったという。

なお、全国の類話は大方は、金持の娘が結婚相手になっっているが、本村の二話のように、公卿・武家の姫君と結婚するのは異色である。話はやはり、山岳信仰者として来村した僧侶・旅人によって、語られて、土地の伝承となったのであろう。ここにも中央の都の文化の薫りを知ることができる。

#### 北條時頼の 山田村行脚

当村の鎌倉地区に、最明寺入道すなわち北條時頼の遺址とその石像堂がある。時頼は鎌倉幕府五代執権であった。晩年は僧門に入り、民情視察のため、僧形で諸国を行脚したといわれ、謡曲「鉢の木」などいろいろな伝説が残っている。当村にも来て、しばらく田中八輔（八郎右衛門の先祖）方に滞在したといわれる。その時、土地の地形が幕府所在地によく似ているとして、地名を鎌倉とつけられたと伝えている。

やがて此所を後にして去去ろうとされたとき、村人は時頼の仁慈深い人柄を感銘して、別れを名残惜しんで止まらなかった。それを不慙に思われたのか、またしばらく留まり、自分の姿を彫刻して片身にせよといひ残されて

出発された。それが現在の石地藏堂で、村の誇りとして年々祭礼を怠らず護持している。富山から二十数度距離でた山里の村に、かかる伝説が残っていることはやはり、かなり都の文化の影響を受けていたのかと奥床しく思われる。

#### 宗良親王塚口碑

当村今山田地区に、県の天然記念物に指定されている、大きな桂の樹がある、南北朝争乱のとき、後醍醐天皇の第八皇子の宗良親王が越中に入り南朝の勢力をとりもどそうと図られた。山田郷へも来て勤王の士を求められたが、不運にもこの桂の木のもので薨じられたという悲話を、地元の人々が語り伝えている。

### 第五節 越中の荘園と武士団の成り立ち

#### 荘園の発達

大化二年（六四六）に発された詔によって制定された班田収授法が次第に行なわれなくなった。聖武天皇の天平十五年（七四三）に墾田永年私財法が発布され、以来、私有地が荘園の名称にて増大されていった。十一世紀の中ごろ、すなわち平安時代中期には、越中の荘園は、射水郡の阿努庄・倉垣庄、砺波郡の殖生保・蟹谷庄・石黒庄・広瀬郷・新川郡の大家庄・丈部庄・堀江庄、郡不明の吉岡庄・大黒庄などが成立していた。これらは主に貴族の公卿・神社・寺院の所領であった。

#### 越中武士団 の台頭

武士の名は古くは奈良時代にはじまった。はじめ「さむらい」として貴族の身邊の警固に奉仕していたが、次第に中央に進出。桓武平氏・清和源氏の出身者を中心に、全国各地に武士団が形成された。